

ある読者からのお便り（シリーズ2「Who cares?」）第3回

※ 読者から頂いた文章をそのまま添付しております。

<私>が<私>に対して他者になることは、他者が<私>を構成し、間接的に<私>としてはたらくことによって可能になる。AにとってのBは図であり、そこでAは地となってはたらく。図は図であればいい、地なんてどうだっていい。Bを敬い慕う言葉かもしれないが、地としてのAはどうなるだろうか。そしてそのAに隠れてはたらく他者はどういった存在なのだろうか。“Who cares?”という質問が宙を切る限り、Aを構成するはずの他者は隠れ続ける。そうしてAは他者によって置き去られた、「どうでもいい」存在になってしまう。

だがこの認識は隠れてはたらく。他者が「どうでもいい」とAに思わせているにも関わらず、その他者を図として捉えられないAは地の価値観、つまりはA自身の価値観として解釈し内面化してしまうのである。他者が間接的にA自身として機能してしまうのだ。“Who cares?”はあえて疑問文で「当然」を強調すると述べたが、この当然とは内面化された他者の価値観なのである。

こうしてAがAを放棄する他者の価値観をA自身のものとして取り込んだ結果が“Who cares?”という問いになっているのだとしたら、ケアをする者にはそれに対して応答する責任があるだろう。それがBの“I DO”である。逆に“Who cares?”という問いかけに答えないケアは有り得るだろうか。都合のいい時に限るケアとは一体何者が為し得るものなのだろうか。それは「誰」なのだろうか。「誰か」のままでは、いつまでも“Who cares?”の問い、いや呪いは解けず、ケアは存在しないだろう。

ケアは何度でも、常に応答し続ける必要がある。そうすることによってケアする者は当然の他者を覆し、ほかならない<私>として図/地関係(ゲシュタルト)の崩壊を起こさねばならない。

あなたには私がいると応答し、<私>が「あなた」にはたらきかけること。それは<私>が「あなた」という図を支えると同時に「あなたを気にかける<私>」という地を構成する。ケアとは図/地関係を崩し続けることであり、ケアする者はケアしない他者を覆し続けることによってその存在を確立するだろう。

(4へ続く)



『あぁ勘違い』 コアラ (ペンネーム)

※ 読者から頂いた文章をそのまま添付しております。

母方の祖父は、戦争が終わるまで、宮仕えをしていて、武士道で生き抜いた人でした。我がまま娘の母を嫁つがす時、「戻って来たらお前と差し違いで自分も死ぬから」と祖父に言われて、東京育ちの母は、遠い富山へ、しかも姑、小姑のいる家に嫁に行きました。毎日泣いてばかりいる母に父は子猫をひろって来たそうです。

難産の末私が生まれた時、母は東京に産みに帰っていたので、祖父は電報を打ったそうです。

「オンナデ、スイマセン」武士道では、「第一子は男子たるべきもの」という一項目があり、女だった私に、男子を産めなかつた娘（私の母）に代わり、詫びの文面を打ったのです。

ところが、それを見た父方の祖母は、女だけど、お乳を吸いませんと受け取ったのです。それはもう、大さわぎだったそうです。

電話のない時代の「あぁ、勘違い」です。

その後、名前をつける時には、名付け親の権利がある人達が各自付けたい名前を箱に入れ、二度引いた名前にしようと言う事で今の名前になったそうです。弟の時には、字画で決めたそうで随分差があるなと思います。自分の名前は気に入っています。

私が小学校二年位の時、母は初めて、私と弟を連れ、里帰りしました。その時、祖父母に会いました。祖父とは、これが最後になりました。六帖一間の部屋に、二人暮らしで、二階屋だったのです。

が、下には別の人達が、住んでいて、階段も急でした。その上風が吹くと、ユラユラとゆれるのです。

子供心には、そんな生活も、惨めに見える事もなく、「グラグラお家」とアダナをつけました。祖父は、子供をあやすのが、得意だったそうで、ひざの後に手を当てて、足を動かすと音が鳴る、我家の通称「プカプカドンドン」というのをやってくれました。

その後すぐに、自分の始末は、自分でつけると覚悟の自害をいたしました。自殺というよりは、自害という言葉が、ぴったりな最後だと思います。最後まで武士道で生き抜いた祖父でした。

父方の祖母はお寺通いの好きな人で、幼い頃、良く連れて行かれました。父の最初の子供だったからか、孫の中でも一番可愛がられていました。昔の人ですので、跡取りの弟を可愛がっても、おかしくないのに、とにかく私々でした。赤ん坊の時も抱きっぱなしで、おっぱいの時だけ、「ハイ、お乳の時間だよ」と連れてくる祖母に、母は「私の子なのに」どひがんでいたそうです。

父方の祖父は、元々は神戸の人だったのですが、台湾に渡り、一旗揚げたそうです。けれど終戦になる前に亡くなり、父はシベリアに抑留されていまして、祖母は娘二人を連れ、着の身着のまま、引き揚げて来た様です。

祖母はいわゆる岸壁の母で、苦勞の多い人生でしたので、七十六才で、老衰で亡くなりました。

母方の祖母は、母にとっては、なさぬ仲でいつも気がきかないと不満を言ってしまいましたが、例のグラグラお家の急な階段を、私が恐いという、おぶっておりにくれました。

私にとっては、責任感をも教えてくれた、やさしい祖母でした。

そんな祖父母達がいてくれたから今の私があるのだと、感謝の念でいっぱいです。

そして、それぞれの伴侶も、何かの仕組で決められていたものと思い、運命のなせるわざに畏敬の念を持たずにはられません。

ヨハク NEWS

令和6年度川越市障害者福祉施設連絡協議会 第2回学習会
～誰もが地域で共に生き生きと働き、暮らせるために～

「暮らしの場の地域課題を考える」

相談支援事業所ヨハク 相談支援専門員
山内智史が、「地域移行を実践する中での地域課題」をテーマに登壇します。

令和6年度 川越市障害者福祉施設連絡協議会 第2回学習会
～誰もが地域で共に生き生きと働き、暮らせるために～

『暮らしの場の地域課題を考える』

開催日時

令和7年2月14日(金)
13:30～16:00(13:20より開場)

コーディネーター

平野 方紹 (ひらの まさあき) 氏

立教大学コミュニティ福祉学部 キャリア支援講師

発表者

相談支援事業所ヨハク 山内 智史氏 「地域移行を実践する中での地域課題」
NPO 法人サポートあおい 樫村 千寛氏 「暮らしの場から見える生活のしづらさとは」
第2川越いもの子作業所 中村 純子氏 「わが子の暮らしの場がない」

参加方法は以下の通りになります。どちらも事前申し込みが必要となります。

【会場参加】

ウェスタ川越 2階 活動室1・2
川越市新宿町1-17-17 川越駅西口より徒歩約5分
※ 駐車場 1時間無料 それ以降有料となります

定員：70名(申し込み先着順)

※当日体調がすぐれない場合は参加をお控えください。
※会場参加の定員に達した場合は、申込フォーム・ホームページにてその旨をご連絡いたします。

【YouTubeでのオンライン配信】

視聴準備・調整は受講者にてお願いいたします

※お申込みいただいた方へは当日までに登録 E-Mail アドレスへ参加用 URL と資料を送付いたします。

お申し込みは専用申込フォームまたは FAX にてお願いいたします。申込締切1月24日(金)まで

カメラ機能付き端末からの
お申込みは QR コードから
受購申し込み 受購後アンケート
フォーム フォーム



【申し込みフォーム URL】
<http://forms.gle/9gyTfNQC26Dt4618>
裏面に FAX 用申込書もございます。

川越市障害者福祉施設連絡協議会の
ホームページを開設しています。

<http://sites.google.com/view/ksrenkyo/>
協議会のイベント情報や学習会情報、川越市内の事業所情報等も掲載しています。
学習会の申し込みはこちらのサイトからも行えます。

《研修に関するお問い合わせ》
川越市障害者福祉施設連絡協議会
(学習委員) ハートポートセンターともいき
TEL: 049-231-1422 (担当: 水見)
E-mail: k.s.renkyo@gmail.com